



大阪の 社会福祉

The social welfare in OSAKA

2026

3

No.844

大阪の社会福祉 No.844



交流してお互いを知り 次へつながる関係づくり

▲GOSANDO南港野球場で野球体験
(12月7日)

2面 住之江区 もう一度野球をしようぜ ～地域と中学生のふれあい～ 野球体験

常識の違うというの、は恐ろしい▼ある日、大分に住む知人から「ゴボウいる？」とメールが来たので、「大好きです」と返信したら、2日後、長さ1メートルを超える大きな段ボール箱が宅急便で届いた。その重さにひるみながら箱を開けたら、中から50本はありそうな大量のゴボウが出てきて目を剥いた▼スーパーの野菜売り場にあるよりたくさんゴボウ。我が家で使えるゴボウというのは、せいぜいキンピラ、豚汁、魚といっしょの煮付け程度のもの。夫婦二人暮らしで1週間に1本消費するのが精一杯だ▼大分がゴボウの産地だとは知らなかったが、産地の常識と都会の常識がこんなにも違うものだと思って、本当に驚いた。この大量のゴボウを我が家だけで消費できるものではない。知り合いの子ども食堂や、ゴボウを調理しそうな比較的高齢の人に会うたびに「ゴボウいらん？」と聞きまくる日々だった▼1年前に日本被団協がノーベル平和賞をもらって、日本中が喜んだのを忘れたかのように、「日本は核を持つべきだ」と言った官邸関係者がいたという報道もあった。▼人によって常識が違うのは、多様性を尊重する社会だから当然だろうが、ゴボウを50本も贈ってくる人の常識だけでなく、自分の常識がすべての人の常識ではないということを心にどめたい。(右)



常識の違うというの、は恐ろしい▼ある日、大分に住む知人から「ゴボウいる？」とメールが来たので、「大好きです」と返信したら、2日後、長さ1メートルを超える大きな段ボール箱が宅急便で届いた。その重さにひるみながら箱を開けたら、中から50本はありそうな大量のゴボウが出てきて目を剥いた▼スーパーの野菜売り場にあるよりたくさんゴボウ。我が家で使えるゴボウというのは、せいぜいキンピラ、豚汁、魚といっしょの煮付け程度のもの。夫婦二人暮らしで1週間に1本消費するのが精一杯だ▼大分がゴボウの産地だとは知らなかったが、産地の常識と都会の常識がこんなにも違うものだと思って、本当に驚いた。この大量のゴボウを我が家だけで消費できるものではない。知り合いの子ども食堂や、ゴボウを調理しそうな比較的高齢の人に会うたびに「ゴボウいらん？」と聞きまくる日々だった▼1年前に日本被団協がノーベル平和賞をもらって、日本中が喜んだのを忘れたかのように、「日本は核を持つべきだ」と言った官邸関係者がいたという報道もあった。▼人によって常識が違うのは、多様性を尊重する社会だから当然だろうが、ゴボウを50本も贈ってくる人の常識だけでなく、自分の常識がすべての人の常識ではないということを心にどめたい。(右)

令和8年3月発行(奇数月1回発行) 発行/社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会 編集・発行人/吉村浩
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町12-10 (大阪市立社会福祉センター内) Tel:06-6765-5601 Fax:06-6765-5605 <https://www.osaka-sishakyo.jp>



みなさまの善意を大切に
—善意銀行—

市社協では、本会の事業運営に協力いただける市民のみなさまや法人団体からの善意の預託(金品・物品)を活用し、社会福祉関係の施設・団体・機関等に助成しています。

このたび、株式会社I-line様からは、令和7年5月14日と12月15日の2回に渡り、SALONIAのドライヤー370個、ヘアアイロン19台、スチーマー2台、シャワーヘッド15本の寄附を賜りました。寄附いただいた物品は、大阪市児童福祉施設連盟と子ども支援ネットワーク(運営:大阪市社協)を通じて、市内の児童福祉施設や子どもの居場所などにおいて、有効に活用させていただきます。また、10月21日には、市社協から感謝状を贈呈しました。

公益社団法人2025年日本国際博覧会協会様からは、11月25日に手指消毒剤(500mlスプレーボトル)330本の寄附を賜りました。

装栄株式会社様からは、12月10日に使い捨てPVC(塩化ビニール)手袋57万5000枚の寄附を賜りました。

寄附いただいた物品は、区社協や大阪市地域福祉施設協議会を通じて、有効に活用させていただきます。



▲装栄株式会社様からのPVC(塩化ビニール)手袋



▲公益社団法人2025年日本国際博覧会協会様からの手指消毒剤



▲市社協の吉村浩常務理事(右)から株式会社I-line経営戦略本部サステナビリティ戦略部長の亀岡さん(左)へ感謝状を贈呈

共同募金とは

赤い羽根共同募金は、戦後間もない昭和22年(1947年)に国民主体の民間運動として始まり、現在は、社会福祉法に基づき、地域の社会福祉課題の解決に取り組む民間団体を支援するしくみとして取り組まれています。

お寄せいただいた寄付金は、ひとり暮らしの高齢者の支援、障がい者の就労支援、車椅子のまま乗れる福祉車両の整備、子ども食堂、高齢者と地域の人たちの交流事業(高齢者サロン)、子育て支援、自殺予防の電話相談活動事業などの地域福祉活動に助成しています。

また、災害への支援や、生活に困窮する人や社会的に孤立する人の支援活動への助成にも役立てられています。



令和8年度

赤い羽根共同募金記念 バッジデザインを募集

令和8年度共同募金運動期間中に、募金運動に協力した方へのお礼や赤い羽根共同募金をPRするためなどに用いる記念バッジのデザインを、近畿6府県の共同募金会が合同募集します。デザインのきまりなど、詳しくは下記ホームページをご覧ください。



▲令和7年度記念バッジデザイン

応募資格

締切

近畿6府県(滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県)内に在住、在勤・在学、またはゆかりのある方(かつて近畿6府県に在住、在勤、在学されていた方)

4/10 必着金

令和8年度

公益財団法人中央競馬馬主社会福祉 財団助成要望書受付のお知らせ

大阪府共同募金会では、一般社団法人京都馬主協会を通じておこなう標記財団の助成金に係る助成要望書を受付けます。一定条件が必要ですので、詳しくは下記ホームページをご覧ください。

受付期間 令和8年3月2日(月)～3月31日(火) 必着

助成対象 民間社会福祉施設等設備

(大阪府共同募金会ホームページ) <https://akaihane-osaka.or.jp> 赤い羽根おおさか

問合せ 大阪府共同募金会事務局まで
TEL:06-6762-8717

大阪の社会福祉に名刺広告を 掲載してみませんか?

本誌に掲載する名刺広告について、新春名刺広告(1月号に掲載)のほか、奇数月発行号でも随時受け付けています。2か月に1回28,000部を発行し、地域活動者、社会福祉に関心のある方を中心に配付しています。

掲載希望月の2か月前までに、お問合せください。

主な配置・配付場所は、各区社会福祉協議会、各区老人福祉センター、大阪市役所、各区役所、各区図書館、各区民センター、地域の会館などです。

詳細はこちら <https://www.osaka-sishakyo.jp/advertisement/>

問合せ先 大阪市社会福祉協議会 福祉部
TEL:06-6765-5606





社会福祉施設の地域における公益的な取組みを「紹介⑦」

NPO法人W・I・N・Gー路をはこぶ

障がい者と地域住民の たまり場をめざして

西成区にあるNPO法人W・I・N・Gー路をはこぶ(以下、WING)は、重症心身障がい者をはじめとする障がい者を対象とした日中活動事業や地域交流事業、国際交流事業を実施している団体で、障がい者と地域との新しい交流の形を企画したフリースペースTamariba(以下、たまりば)を障がい者と地域の方々が同じ立場で



▲利用者や地域住民が横並びで映画鑑賞

参加、交流できる場として運営しています。たまりばでは、「さんでーX たまりばやたまりばコンサート」「CinemaCafeTamariba」「たまりばヨガなどのプログラム」に取り組んでいます。「交流のための交流」「招く・招かれる」という関係に陥りがちな施設行事とならずに、利用者や地域住民が同じ立場で参加し、交流できる企画を打ち出しています。

この取組みは、社会福祉法人ゆりの生活介護施設利用者も参加しています。活動は主にWINGの施設で実施しているため、施設の外に出て、地域の皆さんと一緒に過ごす時間が生まれています。「招く・招かれる」ではなく、フラットな関係づくりが意識

「こじり」できない 自由な活動

たまりばはプログラムごとに担当者やスタッフ、当事者間での企画会議を経て、取り組まれています。「たまりばヨガ」と「CinemaCafeTamariba」を担当する職員の丸谷正幸さんは、「たまりばは制度下にある施設ではなく、施設外で地域住民とフラットに交流できる、つながれる場が必要だと



▲親子と一緒に工作活動

いう思いから立ちあがりまし。地域とのつながりは必要なもの、利用者が安心して、安全に参加できる環境が必要であるため、職員の付き添いのもと、社会参加が実現しています」と話しました。続けて、丸谷さんは、「多様なプログラムを設けていますが、日々の本来業務では職員が思うやりにくいことを実現するには困難な状況のため、公益的な取組みを通じて、職員や法人としてやりたいことを自由に実現できる場として実践しています。

そのため、本来業務に加えて取り組む職員は、他の職員と協力して取り組む風土が形成されてきました。何事もやってみる前に判断することはできない。経験しないとわからないことも多く、経験することで対策や工夫ができます」と語りました。

アートで 学生とつながる

普段のたまりばでの取組みに加え、一年に一度、大阪公立大学(以下、大公立)の学生と利用者の交流会を実施しており、法人として取り組んでいるピー玉アートの体験やポッチャ、お菓子作りなどを通じて、つながりづくりを図っています。そして、現在は大公立のボランティア・市民活動センターと連携して、「ピー玉アート大作戦」で募ったボランティアとともに企画し、大公立の学園祭での販売を目標に取り組んでいます。ピー玉アートを通じて、学生は障がいのある利用者との関わり方を学び、こ

れまでより深く継続した関わりが持てるようにという気持ちが詰まっています。

可能性を広げるのが 私たちの仕事

今後の展開について、丸谷さんは、「現在の課題である広報を強化し、参加者を増やしていきたいです。また、一人だけでは可能性に限界があるため、直接的な関わりではない間接的な支援をサポートしてもらえようなパートナー(共感者)も増やしていきたいです。さらに、重たい障がいをもつ人でも自然と社会に溶け込んで生活できるようにはたらかかいたいと思います」と話しました。



▲ピー玉アートの制作風景

たまりばを担当している丸谷さんへインタビュー

NPO法人W・I・N・Gー路をはこぶ スタッフ 丸谷正幸氏
(平成22年入職 大阪府立大学(現・大阪公立大学)卒業)



障がい者福祉に関心を抱いたのは、学生時代にボランティア活動で、当事者の方と初めて関わったことがきっかけです。さまざまな声とコミュニケーションをとる時間が楽しく、障がい者が地域のなかで暮らす際に、選択肢や可能性を広げていくにはどうすればいいかと考えるようになりました。また、大学に重症心身障がい者が聴講生として講義を受講されていて、瞬きで会話する様子を見て、感銘を受けました。

活動を通じてつながりを感じることの楽しさ

たまりばの活動などを通じて、利用者が地域住民や学生などの施設外の方々と関わり、つながりが広がったときにやりがいを感じます。どのようにすれば利用者やコミュニケーションがとれるのか、感情表現してもらえぬかを模索し、考えることもやりがいつながっています。これからもノウハウを地域住民や学生に伝えていきたいと思っています。

これから福祉業界をめざす人へ

まずはいろいろな世界に触れてほしいですね。私が福祉業界に就職したのは大学時代にさまざまな活動をして、そのなかで、障がい者との関わりから楽しさを感じたので、多くの世界に触れることで自分が本当に好きなことを知ることができると思っています。また、そこで得たことは今後生きてきます。例えば、障がいのある方について知っているかどうかで、当事者への感じ方や関わり方に違いが生まれます。どのような業界で働くにしても、多様な世界に目を向け、関心の幅を広げてほしいと願っています。

風をよむ

デジタルデバイドがもたらす 社会的障壁とソーシャルワーク

大阪公立大学大学院生活科学研究科 教授 鶴川重和

近年、オンライン診療の導入や行政手続きの電子化、マイナンバー制度を基盤とした情報連携など、医療や福祉分野のデジタル化が加速している。しかし、こうした変革の恩恵がすべての人々に等しく及んでいないと言われている。とりわけ、高齢者や所得格差の影響を受ける人々、障害者においては、デバイスの保有状況や活用能力の格差、すなわちデジタルデバイドが医療・福祉サービスの利用を阻害する新たな社会的障壁となっている。

ソーシャルワークの実践現場では、インターネット利用を前提とした制度設計そのものが、支援を必要とする人々を排除する「デジタル・バリア」として機能する可能性がある。デジタルツールの活用が困難な人々は、医療や福祉サービスへのアクセスそのものを制限されかねない。現在、福祉従事者は、申請手続きの代行や対面での補

足説明といったアナログな代替支援によってその間隙を埋めているが、これらは個々の善意や努力によって支えられているのが実状であり、公的制度として明確に位置づけられていない。この課題は日本に限ったものではない。世界保健機関は、デジタルヘルスの推進において公平性の視点が不可欠であると、非デジタルな代替手段を併行して確保する必要性を指摘している。国際連合も「誰一人取り残さない」という理念のもと、デジタル包摂を社会政策の中核に位置づけている。デジタル活用の支援を推進すると同時に、それを利用できない人々が排除されない「ハイブリッドな制度設計」を担保することが不可欠である。医療や福祉従事者が担うアナログな支援を専門的業務として制度的に再定義し、適正な資源配分の対象とする視点が、今後の実践と政策の両面においては不可欠なものとなるのではないだろうか。